

タイトル 『ハンカチ真打』

人物 古今亭一之介（35） 噺家

真由美（25） 一之介の妹

吉田（25） 一之介の落研の後輩。真由美の彼氏

古今亭文楽（63） 一之介の師匠

その他の新真打 前座 観客

○国立演芸場・入り口

『全日本落語協会・新真打襲名披露公演』の幟。

新真打たちの顔写真が貼られている。唯一おどけた表情の一之介（35）の写真。

○同・会場（高座、客席のカットバック）

（高座）

文楽（63）と真剣な表情をした一之介、その他の新真打。

文楽が挨拶の口上を述べている。

文楽「弟子たちが一枚看板になれますよう、どうぞこれからもご贔屓をお願いしたいと、高いところからではございますがお願い申し上げる次第でございます……」

× × ×

（客席）

真由美（25）が温かく見守っている。吉田（25）は感激して口が開いたままになっている。

× × ×

（高座）

カチカチに緊張した一之介。

文楽「新真打の門出を祝しまして、そして皆さま方のご健勝を祈念いたしました。三本締めでございます。ご唱和願申し上げます。イヨオーッ！」

嘶家、観客全員で三本締めをする。
拍手喝采の中、幕が閉まる。

○同・廊下

悲壮な表情の一之介。お腹をさすりながら、額から脂汗を流しながら歩いている。

トイレの前に辿りついた時、真由美と吉田が駆け寄ってくる。

真由美「お兄ちゃん！」

吉田「一之介さん、おめでとうございます。先輩は我が落研の誇り

っす！」

一之介「あ、ありがとう……」

真由美「どうしたの？」

一之介「は、腹が壊したみたい……」

一之介はトイレへ駆け込む。

真由美「もう……」

吉田「今日は主任（トリ）だから緊張してるんだよ」

スッキリした表情で一之介がトイレから出てくる。手が濡れている。

一之介「真由美、ハンカチ貸してくれ」

真由美「やだ、自分の使いなよ」

一之介の懐から朱色の手拭が覗いている。

一之介「これで手なんか拭けつかよ。この手拭はなあ、死んだ大師

匠の肩身なんだよ。お前の貸せ」

真由美は渋々バッグから赤いハンカチを出して一之介に渡す。

吉田「その大師匠って、昭和の名人と言われた古今亭円生師匠っす

よね！ 拝見しても良いっすか！」

一之介「いいぞ」

一之介は機嫌よく手拭を吉田に渡す。吉田は目を輝かせて手拭を手で撫でたり、臭いを嗅いだりする。

一之介 「『お前は見込みがある』ってんでくれたんだ。今日の俺のこの姿、見せてやりたかったな……」

一之介がハンカチで涙を拭う。

真由美と吉田も目頭を熱くする。

吉田 「ううっ……」

感極まった吉田が手拭で涙を拭う。

一之介 「よし！ 大師匠の十八番だった『麻暖簾』やるぞ！」

吉田 「おおっ！」

真由美 「『麻暖簾』？」

吉田 「盲目の按摩さんのネタだよ」

前座がやってくる。

前座 「一之介さん、そろそろ出番ですよ」

真由美 「頑張ってね！」

一之介 「おう！」

一之介は笑顔で手を振りながら楽屋へ入っていく。

○同・会場（高座、客席、高座の袖のカットバック）

（客席）

真由美と吉田が席に座る。

吉田 「『麻暖簾』楽しみだ」

吉田は手拭を握り締めている。

真由美は手拭を見てハッとする。

真由美 「ねえ、それ……」

吉田は手拭を見て驚く。

吉田 「あーっ！ 先輩に返すの忘れた！」

真由美 「ていうことは……」

顔を見合わせる真由美と吉田。

× × ×

（高座）

出囃子が鳴る。盛大な拍手に迎えられ一之介が登場。

一之介は座布団に正座する。ハンカチと扇子を脇に置き、観客に向かって深々とお辞儀をする。

一之介は正面を向いて

一之介「えー、昔は按摩という仕事がございました、今でいうところのマッサージのことなんですが、江戸のある長屋に杵一（もくいち）さんという目の見えない按摩さんがいますね、その人はたいそう負けず嫌いの性格だったそうで…」

× × ×

(客席)

張り詰めた表情の真由美と吉田。

× × ×

一之介が上手にきる。

一之介「杵一さん、目が不自由だと何事も不便だろう」

一之介は目を閉じ、下手にきる。

一之介「いいえ、あたしからすると目開きほどそそっかしい者はいませんよ。車に轆かれるのは大方が目開きですよ」

観客の笑い声。得意そうな一之介。

× × ×

(客席)

他の観客は笑っているが、真由美と吉田だけ笑っていない。

真由美「そそっかしいのはお兄ちゃんだよ……」

吉田「ああ、俺のせいだ……」

吉田が頭を抱える。

× × ×

(高座の袖)

文楽が高座を覗いている。

文楽「あの野郎、腕あげたなあ」

感心している文楽。

× × ×

(高座)

目を閉じて下手にきつたままの一之介。一之介の手がハンカチに伸びる。

一之介「この前、着物を買に行きましたら店の者があたしに似合う色や柄を選んでくれたんですよ、そんであたしや……」

× × ×

(客席)

真由美と吉田が息を飲む。

× × ×

(高座)

一之介はハンカチの両手で開き、客席へ向かってパツと広げる。

可愛らしいクマさんが大きくプリントされた柄。

一之介「うん、なかなか良い柄ですなって言っってやったんですよ」
観客の爆笑。得意そうな一之介。

× × ×

(高座の袖)

目が点になる文楽。

× × ×

(高座)

得意そうな一之介。客席から「それハンカチじゃねえかよ」「クマちゃん可愛い」という声が聞こえる。

一之介「え？」

一之介は目を開け、ハンカチを凝視する。

一之介「こ、これは！」

客席から「目が見えちゃダメだろ」というツツコミ。観客の大爆笑。

一之介は客席に目をやる。

× × ×

(客席)

手を合わせて謝る吉田。

悲しそうな表情の真由美。

× × ×

(高座)

一之介は真由美に微笑む。

一之介は客席に向かって照れくさそうに

一之介「今日は妹が観にきてくれてましてね、さっき便所に行つて、妹にハンカチを借りた時に手拭と間違つて持つてきちまつたようですね」

一之介は照れくさそうに頭を搔く。

一之介「これは、十年前、妹の誕生日に買ってあげたものなんですよ。あの頃は二ツ目になったばかりで、本当に金がなくて……ハンカチくらいしか買ってあげられなかつたんですね……それを未だにこうして妹が大事に持つていてくれたつてのが、本当に嬉しいです……ありがとう、真由美」

× × ×

(客席)

真由美が嬉し泣きをする。吉田が真由美の肩を抱き寄せる。

× × ×

(高座)

客席から拍手が起こる。照れくさそうに一之介。

一之介「そうそう、演芸場の直ぐそばの交差点にあるお店で買ったんですよ。ハンカチ屋だけに、四つ角にある……なんつてね」

観客が大爆笑する。

× × ×

(高座の袖)

ほっと胸をなでおろす文楽。

× × ×

(客席)

他の観客と共に大爆笑する真由美と吉田。

× × ×

(高座)

一之介がハンカチを広げておどけてみせる。

一之介はカメラのフラッシュを浴びる。

○新聞紙面

「ハンカチ真打」の見出し。高座でハンカチを広げておどけてみせる一之介の写真と記事が大きく載っている。

「完」

二〇〇九年六月二八日

石塚和美